

畿内家形石棺にみる棺蓋短側辺突起の変化

山本 ジェームズ

はじめに

古墳時代後期を中心として日本列島に分布する家形石棺は、西日本では、九州地域を中心とする九州家形石棺⁽¹⁾、出雲などの山陰地域を中心とする出雲家形石棺⁽²⁾、そして近畿地域を中心とする畿内家形石棺⁽³⁾の三石棺群に大別することが可能である。これらの石棺群は家形石棺のカテゴリーに含められながらも三者三様であり、相互に影響を及ぼし合いながら発展していったものと考えられる。

本稿では、畿内家形石棺を中心に扱う。特に、棺蓋短側辺突起の発生と変化を検討し、畿内中樞部⁽⁴⁾において主流となる型式が確立された過程を考察する。また、東日本各地に点在する家形石棺とも比較し、畿内家形石棺との関係性の一端を明らかにすることが目的である。そのため、原則的には棺蓋長短両側辺に突起をもつ石棺を扱うことになる。

1. 研究小史と課題

家形石棺に関する研究は古く、昭和年間までに八木契三郎氏などの研究が知られており（八木1899）、また、家形石棺に初めて「家形」の名称を与えたのは高橋健自氏であった（高橋1913）。家形石棺を納める古墳も多く調査され、東乗鞍古墳や権現堂古墳、條ウル神古墳、鴨稻荷山古墳などが報告されてきた。その後、資料の蓄積を経て発表された小林行雄氏の論考は、今日の家形石棺研究の基礎を打ち立てるものであった（小林1951）。現在では小林氏の研究を基盤に発展的研究がなされ、あるいは新視点から家形石棺を捉える研究により、家形石棺研究は大きく進んできたと言える。

多くの家形石棺研究の中で、研究者の注目を浴びるのはおよそ棺蓋の諸要素である。特に畿内の家形石棺に関しては、突起の外観的形狀や規模、断面形状、数や配置、突出する角度、あるいは棺蓋頂部平坦面の広狭、厚さなど棺蓋から得られる情報量が多い。これら諸要素が年代的な指標ともなり得るため石棺の新旧関係を捉える上で有効であり、石材の分析や石棺の分布論とともに、型式分類や編年構築作業の根幹の一端を担ってきた経緯がある（和田1976、増田1977a、藤井1979など）。

これら諸要素のなかでも棺蓋の突起をめぐる諸要素が多いが、そもそも畿内家形石棺の棺蓋突起の起源に関しては、多くは古墳時代中期に盛行した長持形石棺に求める見解が一般的であった。近年の論考で増田氏は、各様式の石棺に与えられた名称では偏見や先入観を持ってしまう危険性を指摘し、同時に、個々の石棺様式で完結する従来の研究法では他様式の石棺との相互研究が難しいとして、包括的研究を可能とするためにも新たな呼称を提起した⁽⁵⁾。そして、古墳時代の石棺⁽⁶⁾を通して突起の配置に共通性や法則性があると指摘している（増田2004）。

短側辺突起に限っては、長側辺突起と規模が異なると指摘しながらも「規格性を持たない」（藤井1979：233）石棺として、短側辺突起の特徴が黙過されてしまったこともある。短側辺突起は畿内の家形石棺においてもすべての石棺に造り出されるわけではないため、特徴がより顕著な長側辺突起や、より普遍的な要素である棺蓋頂部平坦面などの「大勢」の前では、いまひとつ重要視されてこなかった現状がある。このように、短側辺突起はあくまで棺蓋突起の一部として長側辺突起と一緒に扱われ、その発生や展開を細部まで言及しようと試みた研究は少ない。

本稿では、家形石棺の棺蓋短側辺突起に着目して、畿内家形石棺の主流型式となった「長側辺に二対、短側辺に一对の突起を配す」型式⁽⁷⁾が突如発生したものではなく、段階的に成立した過程を検討する。

2. 短側辺無突起石棺⁽⁸⁾

畿内家形石棺の出現に関しては、未だ不明瞭な点が多い。畿内地域においては六世紀前半台に出現する長側辺にのみ二対の突起が配される石棺⁽⁹⁾は、岡山県の築山古墳棺とも類似した形態をとる。両者に共通する最大の特徴は、使用された石材が熊本県宇土市で産出される阿蘇溶結凝灰岩の一種である馬門石という点にある。畿内地域では、二上山系凝灰岩が使用されるようになると、細部や規模では若干の差はあるものの、馬門石製石棺と同じ様式の石棺が製作される。二上山系凝灰岩の使用開始以降は馬門石製石棺の使用が影を潜めるため、二上山系凝灰岩開発を契機に畿内地域の家形石棺は独自色を強めていくなると言えよう。しかし、その出現の背景には遠路運搬されて来た馬門石製石棺があったと考えて良さそうである⁽¹⁰⁾。

前述のように、畿内地域に出現した馬門石製石棺の「長側辺にのみ二対の突起を配す」型式は、二上山の石切り場の開発⁽¹¹⁾に伴い、二上山から産出する凝灰岩で製作されるようになる。笛吹神社古墳棺や市尾墓山古墳棺では突起は肥大化し、石棺の規模も大きくなるのが看取される。二上山系凝灰岩は、奈良県・大阪府に産出する岩石であるため、馬門石製石棺によって導入された石棺様式が畿内地域に在地化し、石棺規模や突起の特徴など独自性を発展させたと考えられる。

3. 短側辺突起の発生：第一段階

畿内中枢部で二上山系凝灰岩を使用する石棺が見られる一方、近江地域には依然、馬門石製石棺

が導入されている。滋賀県に野洲円山古墳、野洲甲山古墳の二棺が存在するが、二上山系凝灰岩製石棺と比較すると、長側辺に配された突起は規模も形状も若干の差異が認められる。最大の特徴は、近江地域の二棺の棺蓋短側辺にある突起状の突出部⁽¹²⁾である。円山古墳では短側辺の突出部が欠損しているが、棺に残る痕跡から少なくとも幅は90cm以上、厚み23cmの突出部が存在したことが判明している。甲山古墳においても同様に幅58cm、厚み25cmの突出部が存在している。長側辺突起が円山古墳では幅32cm、甲山古墳では37cm程度であり、形状も不整円形あるいは

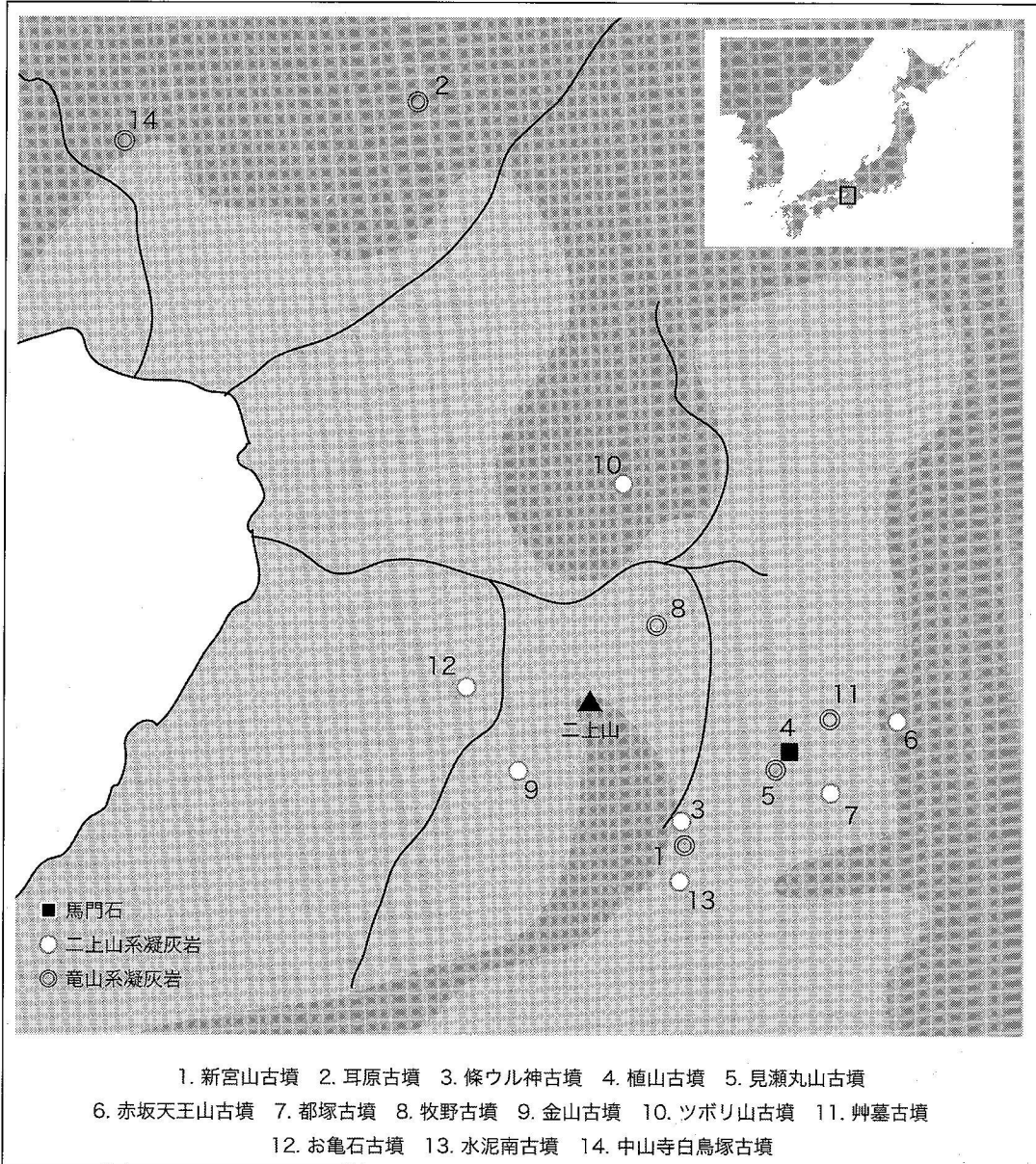


図1 家形石棺分布図1

方形を呈していることから、長側辺突起と短側辺突出部においては明確な差異が認められる。

一方、琵琶湖を北に隔てた高島の地には、鴨稻荷山古墳が所在している。この横穴式石室に安置されていた石棺は野洲の二棺と石材を異にし⁽¹³⁾、また、長側辺に配された二対の突起は市尾墓山古墳棺や権現堂古墳棺など畿内中枢部の石棺と類似している。外観的特徴の類似をもってグループ化しうるならば、鴨稻荷山古墳棺は琵琶湖南岸に相対する野洲の二棺よりも、むしろ奈良盆地南部の市尾墓山古墳棺や権現堂古墳棺との近似が指摘できる。二上山系凝灰岩製石棺の使用という畿内中枢部の動向とも合致している点からも、高島の地にあつて鴨稻荷山古墳は畿内中枢部との強い結びつきが想定できる。特筆すべきは、上述のように畿内中枢部との強い結びつきが想定される鴨稻荷山古墳棺でも、棺蓋短側辺に突出する突出部が存在するという点である。突出部幅は棺蓋幅に迫る78cmを測り、厚みは垂直面いっぱいの15cmである。

畿内地域に搬入された馬門石製石棺のうち、短側辺に突起を製作しているものは舟形石棺に類するもので長側辺に突起をもたないため、形態上の直接的な系譜は求められない。また、長側辺にのみ二

対の突起を配する馬門石製石棺の様式においては、これほど長大扁平な突出部を製作したものは見当たらない。これらの馬門石製石棺はもとより、搬入された馬門石製石棺を模倣して製作されたと考えられる畿内中枢部の初期二上山系凝灰岩製石棺にも認められる特徴ではない。したがって、この長大な短側辺突出部は、畿内家形石棺としては近江地域において変則的に発生した要素と考えら

表1 棺蓋突起規模比較表

	古墳名	突起の規模(cm)	
		長側辺	短側辺
1	野洲円山古墳	32	91~?
2	野洲甲山古墳	37	58
3	鴨稻荷山古墳	46	72
4	新宮山古墳	32	27
5	耳原古墳・奥棺	40	39
6	條ウル神古墳	36	34
7	植山古墳	39	29
8	都塚古墳	44	38
9	赤坂天王山古墳	34	33
10	牧野古墳	40	39
11	見瀬丸山古墳・奥棺	39	33
12	見瀬丸山古墳・前棺	35	38
13	金山古墳・奥棺	36	36
14	金山古墳・前棺	37	38
15	ツボリ山古墳・奥棺	40	41
16	中山寺白鳥塚古墳	38	38
17	水泥南古墳・奥棺	40	39
18	艸墓古墳	43	51
19	お亀石古墳	41	41
20	小山市所在棺	30	?
21	こうもり塚古墳	34	25
22	江崎古墳	26	23
23	賤機山古墳	35	39
24	駿河丸山古墳	29	22
25	宝塔山古墳	32	30
26	綾塚古墳	22	25

れる⁽¹⁴⁾。

以上のように、円山古墳棺や甲山古墳棺とは石材や微細な形状の違いを越えて、三棺には共通して短側辺に突出部が造り出されている。この突出部を近江的要素と位置づけることが可能であろう。これを短側辺突起「同列化」への第一段階として考える。

以後、近江地域では家形石棺が使用されることはなくなるが、当該地域で発生した棺蓋短側辺の突出部は、畿内中枢部の家形石棺において展開していくこととなる⁽¹⁵⁾。

4. 短側辺突起の変化：第二段階

近江地域では家形石棺の使用が停止するが、短側辺に突起をもつ家形石棺は場所を移して畿内中枢部に見られるようになる。奈良県御所市新宮山古墳棺や大阪府茨木市耳原古墳の奥棺においては、規模の点で短側辺突起と長側辺突起とのあいだに明確な差がなくなる。耳原古墳奥棺では長側辺の突起幅は37～42cm、短側辺の突起幅は32～40cmである。長側辺突起より短側辺突起の方がやや小振りではあるが、ほぼ同規模と捉えることができる。また、新宮山古墳棺の長側辺突起および短側辺突起は、いずれも幅が25～30cmであり、形状も近しく製作されている。

しかし、新宮山古墳棺、耳原古墳奥棺のどちらの石棺においても、短側辺突起を造り出す高さは依然として低く、棺蓋の斜面と垂直面にまたがる位置に製作されている。この特徴は奈良県御所市條ウル神古墳棺、同橿原市植山古墳棺にも共通する。長側辺突起と規模や形状はほぼ同一であるにも関わらず、短側辺の突起のみが高さを違い、斜面と垂直面の境に造り出される。複数棺でこの特徴が認められることから、凝灰岩原材の形状や規模に左右された可能性は小さい。また、條ウル神古墳棺や植山古墳棺では面取り加工など整形が丁寧におこなわれており、石棺の稜線は全体的にシャープである。植山古墳棺に関しては、石棺表面に割り付け線と考えられる線刻が残存しており、緻密な設計による製作であることを示唆している。割り付け線は棺蓋棺身におよび、内面の削り抜き加工の範囲や棺蓋突起の整形のために刻まれている⁽¹⁶⁾。つまり、長側辺突起と短側辺突起の造り出し高さに生じた差は、偶発的な要因による現象ではなく、製作者⁽¹⁷⁾によって意識的におこなわれたと言える。

以上のように、形状や規模が近いという点からは長側辺突起との明確な区別がなされなくなることが看取できる。しかし、短側辺突起の造り出す高さが低いという点からは、製作者に両側辺突起が同一のものとする認識が依然として存在しなかったと解釈することができる。「長側辺突起と規模や形状、造り出す高さが明確に異なる扁平幅広な短側辺突出部」という第一段階を脱し、「長側辺突起と規模や形状は近似するが造り出す高さが異なる短側辺突起」を第二段階とする。

5. 短側辺突起の「同列化」現象：第三段階

奈良県橿原市見瀬丸山古墳前棺、同桜井市赤坂天王山古墳棺、同明日香村都塚古墳棺では、短側

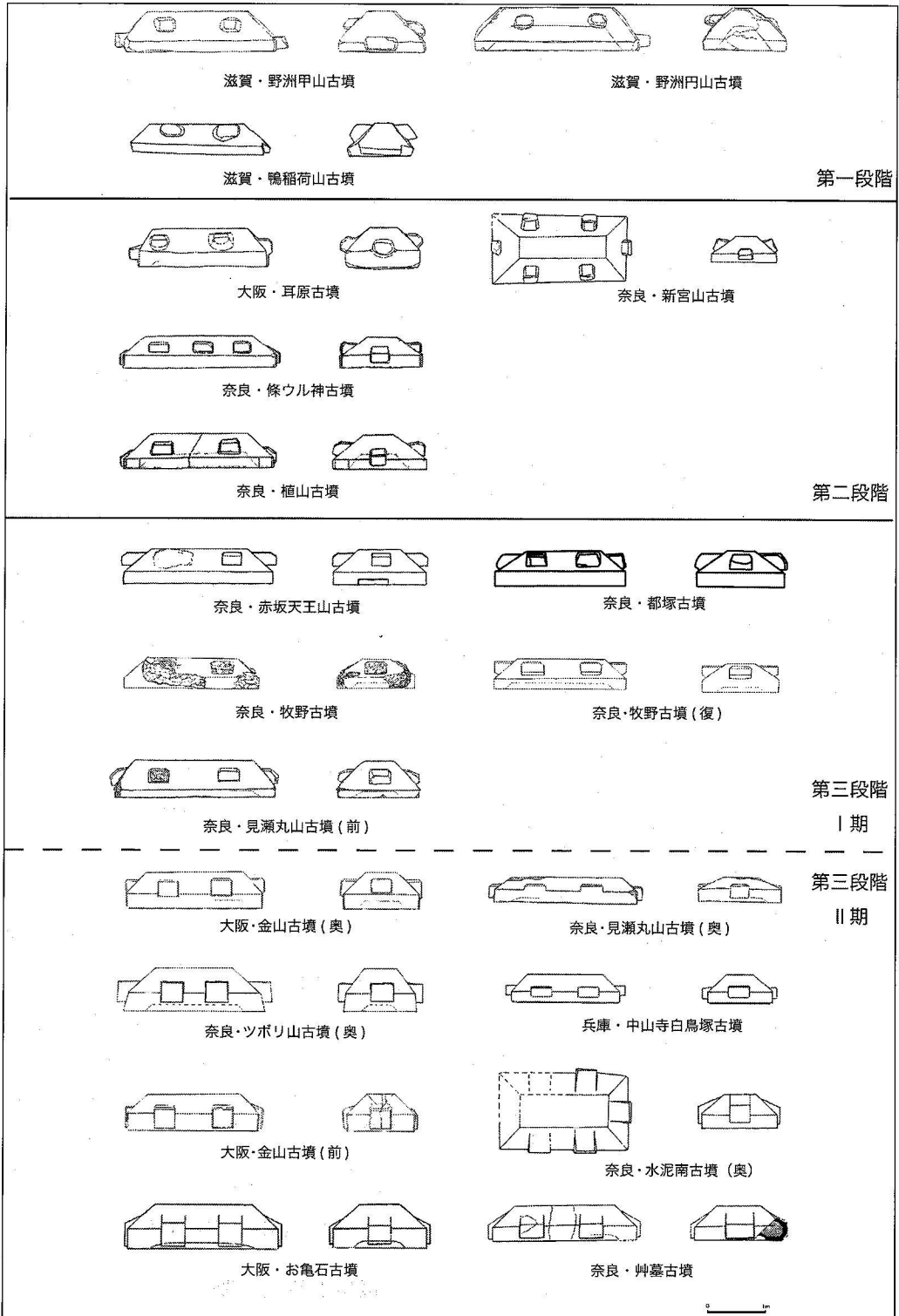


図2 棺蓋短側辺突起変遷図1

辺突起の規模や形状は長側辺の突起とほぼ同一であり、突出角度が水平であることに加えて、短側辺突起の造り出し位置が移動し、長側辺突起と同じ斜面に造り出されるようになる。同北葛城郡^{ばく}牧野古墳^やでは、玄室奥壁にあった劔拔式家形石棺の蓋が大破しながらも残存していた。この棺蓋に残されていた突起の痕跡からも、長短両側辺の突起の規模や形状がほぼ同一であり、いずれも斜面部に造り出されていることが分かる⁽¹⁸⁾。大阪府南河内郡金山古墳奥棺、見瀬丸山古墳奥棺では、棺蓋突起の造り出し高さはやや下がり、突起の下端は垂直面との境に近くなる。長短両側辺の突起は形状や規模の点では同一である。金山古墳前棺、奈良県生駒郡ツボリ山古墳奥棺、兵庫県宝塚市中山寺白鳥塚古墳、奈良県御所市水泥南古墳奥棺では、棺蓋突起の造り出し高さがさらに下がり、斜面部と垂直面の間につけられている。奈良県桜井市艸墓古墳、大阪府富田林市お亀石古墳では、棺蓋突起は造り出す高さは斜面部からではあるが、突起の突出角度は下向きとなっているため、突起の正面はほぼ垂直面に到達している。

これらの石棺では、それぞれの石棺間での棺蓋突起の突出角度や造り出し高さに差がある。しかし、個々の石棺では短側辺突起の造り出し高さが長側辺と同じ高さになっていることで、規模や形状の特徴とあわせて長短両側辺の区別なく突起が造り出されていると理解できる。以上の特徴を以て前段階と区別し、第三段階とする。

近江地域の石棺に出現した長側辺突起とはまったく異質であった短側辺の長大扁平突出部（第一

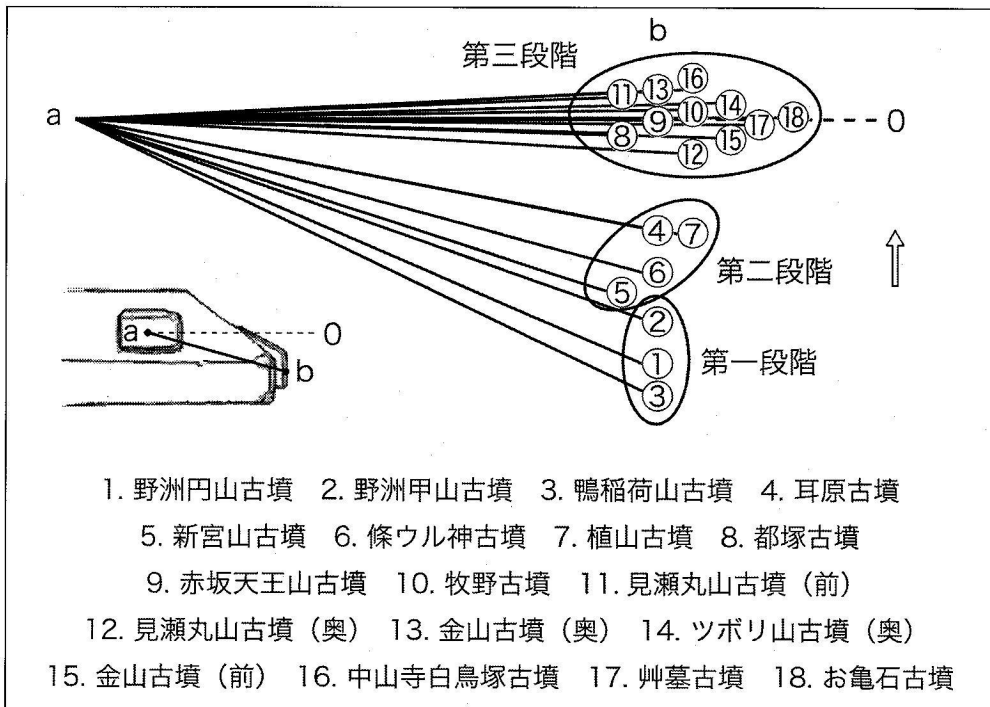


図3 棺蓋短側辺突起変遷模式図1

段階)は、畿内中枢部において長側辺突起と外見を似せるように製作され(第二段階)、長側辺突起と造り出される高さも同一になるにいたった(第三段階)。本稿では、長短両側辺の突起が、明確な区分なく造り出されるこの現象を「短側辺突起の同列化」と呼ぶこととする。

以上の三段階を模式図で示した。図3は長側辺突起の正面中心をa、短側辺突起の中央をbとしたときの、長側辺突起の位置に対する短側辺突起の造り出しの高さを表したものである。なお、0は長側辺の高さaの延長線である。傾向としてはbの位置がa-0線に近づくにつれ長短両側辺間の高低差が解消されていくことになる。段階別にグループ分けをおこなうと、第一から第三までの各段階の石棺が、それぞれまとまりを見せることが理解される。このとき個々の石棺に規模の差が見られたり石棺の形状が不均等であると、長短両側辺突起の高低差が大きくなったり小さくなったりする。各段階のグループの中において若干のゆらぎがあるものの、まとまりを逸脱する石棺はなく、第一から第三段階まで比較的スムーズな移行を想定することができる。

6. 第三段階の細分

さて、短側辺突起の規模や形状、造り出される高さが長側辺突起と同一になる「短側辺の同列化」現象が顕在化した第三段階以降、短側辺突起も長側辺突起の突出角度の変化に従うという特徴が認められる。畿内家形石棺の長側辺突起には時期が下るにつれ突出角度が変化するという顕著な特徴がある。概略すると以下のようなになる。畿内に搬入された馬門石製石棺の長側辺突起は棺蓋斜面に造り出されるが、その際突起が斜め上方に突出するかたちで製作されている。これら馬門石製石棺を模倣する畿内中枢部の初期二上山系凝灰岩製石棺においてもこの特徴は認められる。その後畿内中枢部において家形石棺が盛行していくなかで、長側辺突起の突出角度は斜め上方から水平へと変化し、やがて斜め下方へと角度は変わっていく傾向が指摘されている⁽¹⁹⁾(小林1951、増田2003ほか)。

「短側辺突起の同列化」以降において、長短両側辺突起の造り出し位置の推移および突出角度の変化がもっとも理解しやすい例に金山古墳の二棺がある。金山古墳は円墳を二つ組み合わせた双円墳であるが、その北丘の横穴式石室玄室には家形石棺二棺が安置されていた。玄室にある奥棺では、棺蓋突起がすべて斜面部に造り出されており、突起の突出角度はほぼ水平である。一方で、羨道にある前棺の棺蓋突起は、斜面部と垂直面の境に造り出されており、突出角度はやや下向きになる。突起以外では、前棺が奥棺と比較して規模が若干小さいほかは両棺に大差はない。細かな差が認められても型式上は同一と考えられるため、両棺はある程度の限定的な時期幅での連続的な製作が想定できる。つまり、金山古墳の二棺の棺蓋突起に見られる特徴は、そのまま石棺の時間的な変化として捉えることが可能であろう⁽²⁰⁾。

金山古墳の事例から見るように、棺蓋突起の造り出される高さが斜面部から斜面部と垂直面の間へと下降するという傾向と、突起の突出角度が水平から下向きへと変化する特徴は、畿内家形石

棺の時系列として新旧関係を推察するための有効な材料となる。ただし、第三段階においては、突起の造り出される高さや突出角度のいずれの特徴においても、長短両側辺突起の動向に差はないため、第三段階以降に独立した段階を設定することは、「短側辺突起の同列化」の概念上、困難である。

そこで、第三段階を二期に細分し、短側辺突起が水平に棺蓋斜面部に造り出され、「短側辺突起の同列化」が完成した状態をⅠ期とし、赤坂天王山古墳棺、都塚古墳棺、牧野古墳棺、見瀬丸山古墳前棺⁽²¹⁾をあてる。そして、長短両側辺の突起が下向きに造り出される、あるいは造り出す高さが下降し、斜面部と垂直面にまたがるようになる状態をⅡ期とし、金山古墳二棺⁽²²⁾、ツボリ山古墳奥棺、見瀬丸山古墳奥棺、中山寺白鳥塚古墳棺、水南古墳奥棺、艸墓古墳棺、お亀石古墳棺をあてる。

7. 年代観

築造から1000年以上も経過している古墳の多くは、盗掘に遭う場合が少なくない。本稿で取り扱う古墳もまた例外でなく、出土する遺物から年代を与えることが困難な事例が多い。また、遺物が検出された場合でも、横穴式石室であるが故に、追葬に伴う副葬品であるという可能性も常に検討する必要がある。以上に注意して、各段階に年代観を打ち出したい。なお、なかには実年代と合致しない可能性の事例もあるが、各段階は石棺の短側辺突起の特徴により設定しているものであり、実年代が各段階を規定するものではない。

まず、第一段階は、畿内中枢部ですでに馬門石製石棺を模倣した二上山系凝灰岩製石棺が製作されるなかで、短側辺に突出部を設けた近江地域の三棺によって規定できる。野洲甲山古墳では田辺編年TK-10型式（以下「田辺編年」「型式」は省略する。）期と位置づけられる須恵器が出土しており（野洲町教育委員会2001）、野洲円山古墳の石棺は甲山古墳棺と特徴が近似するため、両者にはほぼ同じ年代を与えても差し支えないだろう。鴨稻荷山古墳でもTK-10に相当する須恵器が出土している（高島町教育委員会1987）。したがって、短側辺に扁平長大な突出部をもつ近江的要素の三棺はTK-10期とみなし、これを第一段階の年代とする。

第二段階では、耳原古墳および新宮山古墳は出土遺物が知られていない。耳原古墳は報告者も年代を絞れないようであり、石室をとれば七世紀前半、石棺をとれば六世紀後半⁽²³⁾としている（大阪府教育委員会1989）。一方、條ウル神古墳ではTK-209の杯身が出土しているが、追葬時のものと考えられている（藤田2002）ため、築造年代はTK-209期以前としておく。馬門石製の家形石棺をもつ植山古墳も六世紀後半という年代が与えられており、被葬者として推古天皇と竹田皇子が挙げられている（竹田2003）。以上を総合すると、長側辺突起と規模や形状は近似するが、短側辺突起の造り出す高さが異なる石棺である第二段階の年代は、TK-10より新しくTK-209より古いとすることができる。概ねTK-43期と言えらるだろうか。

続いて第三段階である。赤坂天王山古墳は遺物が知られていないが、石室からは六世紀末から七

世紀初めの年代が与えられる（一瀬1993）。牧野古墳では石室より一万個以上の粟玉を含む多量の遺物が得られており、総合的に判断し六世紀末という年代が与えられている（広陵町教育委員会1987）。また、牧野古墳は赤坂天王山古墳と同規格の石室を構築しており、両者の関係もうかがえるものである。都塚古墳からは刀子や鉄鏃、須恵器などが出土しており、六世紀後半と考えられている（明日香村史刊行会1974）。最後の前方後円墳などとも称される見瀬丸山古墳であるが、出土した須恵器片はTK-43とされている（宮内庁1994）。石室は六世紀後葉ともされる（一瀬1993）ので、遺物と石室には大幅な年代の齟齬はきたさないが、遺物は原位置を保っていない上に石室内には現代ゴミに至る混入物が認められるので、すぐさま構築（埋葬）年代と断ずることは難しい。加えて、石室内に安置されている石棺二棺は形態上の差異が認められ、しかも通常はより古いと判断される玄室奥棺の方がより新しい特徴を示すなど、年代決定を困難にしている。一次葬がTK-43期であっても少し幅をもたせて年代を設定すると、見瀬丸山古墳は六世紀後葉から七世紀初めとできよう。以上を総合すると、短側辺突起の形状や規模、造り出す高さが長側辺突起と同じになる第三段階Ⅰ期は、TK-43～TK-209期に該当するものと考えられる。

Ⅱ期には、金山古墳、ツボリ山古墳、見瀬丸山古墳、中山寺白鳥塚古墳、水泥南古墳、艸墓古墳、お亀石古墳がある。金山古墳はくびれ部よりTK-209の須恵器子持器台や壺が検出され、築造時期は六世紀末から七世紀初頭と考えられている（大塚ほか1989）。中山寺白鳥塚古墳は遺物が知られていないため不明だが、石棺は金山古墳の石棺の特徴と符号するため、同じ六世紀末から七世紀初頭の年代が与えられよう。ツボリ山古墳は盗掘のためか遺物はほとんどなく、検出されたものも二次的な混入遺物であり古墳の年代特定にはいたっていない。石室と石棺から六世紀中～後半と推定されている（奈良県教育委員会1972）。お亀石古墳もまた出土遺物がないが、棺身短側面に横口を設け、周囲に平瓦を積むことで石室構築を省略したと考えられる異例な石棺である。使用された平瓦から近くの新堂廃寺との関連も指摘され、七世紀中葉という年代が推定されている（富田林市1985）。水泥南古墳、艸墓古墳においても遺物は知られていないが、お亀石古墳棺と石棺の特徴が似ているという点から艸墓古墳は同じく七世紀中葉、水泥南古墳は少し古く遡り七世紀前葉という年代にしておきたい。以上をまとめると、第三段階Ⅱ期はTK-209期を中心として、一部TK-217期まで下がる可能性がある。

さて、ここまで畿内中枢部における畿内家形石棺の短側辺突起の変化を検討してきた。各段階に分類した古墳の築造年代（推定も含む）から与えた年代観に従えば、TK-10（第一段階）→TK-43（第二段階）→TK-43～TK-209（第三段階Ⅰ期）→TK-209～TK-217（第三段階Ⅱ期）と棺蓋突起が段階的に足並みを揃えて造り出されていく様子が看取できる。この「同じに作る」という意識を「同列化」という現象が表しているとするならば、畿内家形石棺の矩形化や丁寧な整形などの諸要素と併せて、この「短側辺突起の同列化」という第三段階Ⅰ期を以て畿内家形石棺の定型化とみてよいと考える⁽²⁴⁾。

8. 畿内地域以外の石棺

それでは畿内以外の地域の家形石棺ではどうであろうか、若干の検討を試みる。

畿内家形石棺の「短側辺突起の同列化」の過程を畿内以外の地域の家形石棺に当てはめると図5ようになる。まず栃木県小山市所在棺であるが、現在石棺が置かれている千駄塚古墳付近の円墳から出土したと言われる。ただし、肝心の円墳はすでに殲滅しており、詳細は不明である。石棺の表面は雨ざらしのためか風化が激しいが、棺蓋突起は確認できる。短側辺突起の造り出される高さは長側辺突起とほぼ同一であるため、「同列化」の第三段階Ⅰ期に含めても違和感のない資料で

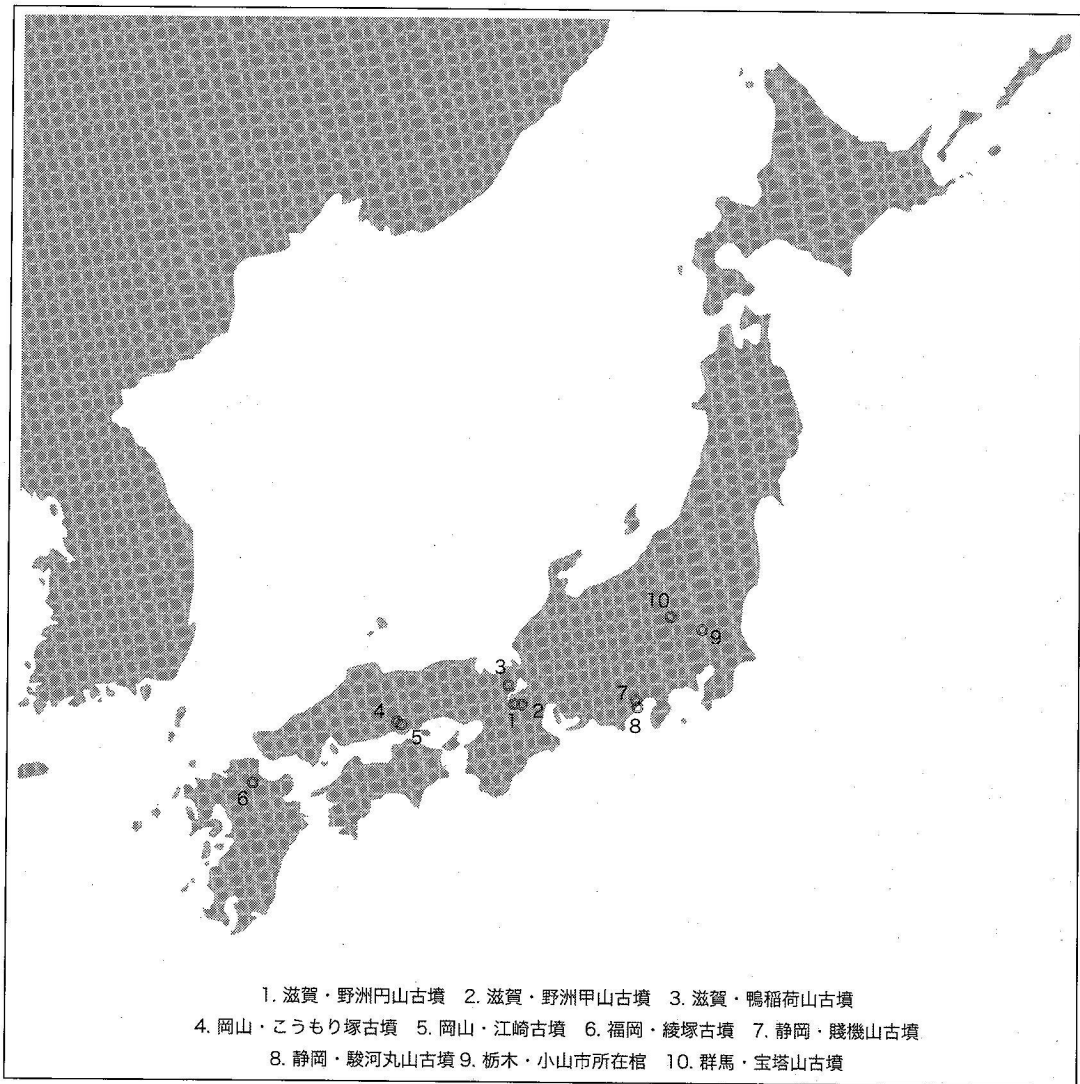


図4 家形石棺分布図2

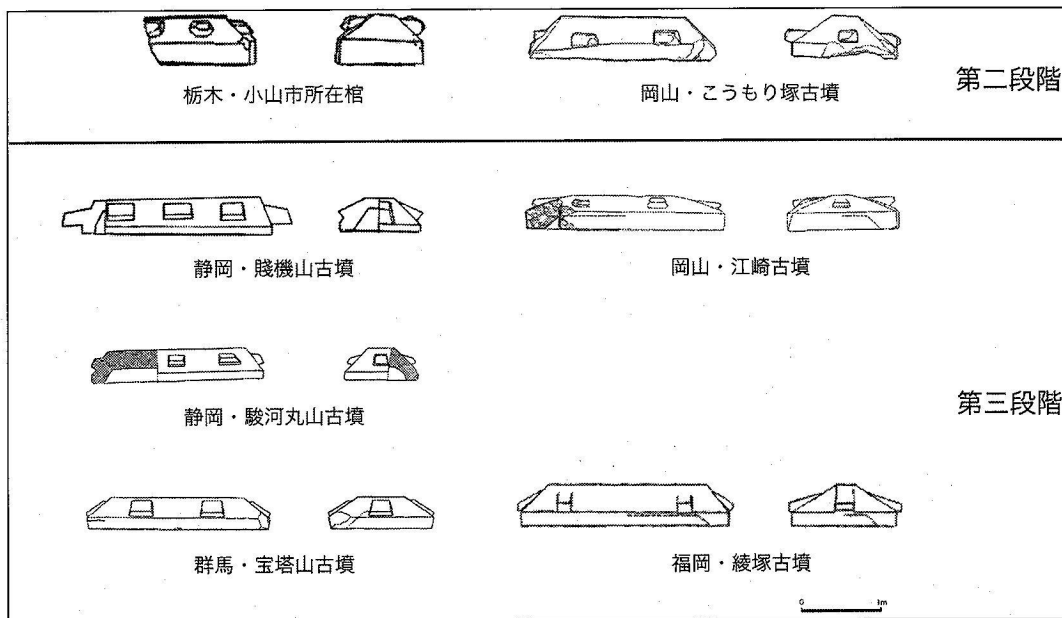


図5 棺蓋短側辺突起変遷図2

ある。しかし、風化が激しいためもあるが長短両側辺の突起では規模や形状が不均一という印象を受けるため、第二段階のなかでも最終末、「同列化」前夜の石棺として捉えた。

岡山県総社市こうもり塚古墳棺は、盗掘の際による破壊であろう、棺が部分的に欠損している。そのため、短側辺突起の様子は分かりにくい。前後の二突起で造り出される高さが若干異なっている。また、長側辺突起とは形状や造り出される高さが近似するが、規模の点で短側辺突起の方が小振りである。以上の点を踏まえると、「同列化」以前の石棺であると結論づけることができる。

続いて第三段階と考えられる石棺である。岡山県総社市江崎古墳は、やや小振りながらも長短両側辺突起がすべて同じ高さで造り出されており、規模や形状も類似する。突起の特徴から「同列化」を認めると、畿内中樞部の第三段階Ⅰ期に相当する。古墳に与えられている年代も六世紀後葉から七世紀初頭であり（総社市1987）、石棺の特徴とも齟齬をきたさない。

静岡県静岡市賤機山古墳棺および同駿河丸山古墳棺は、畿内中樞部でも類例が少ない突起配置を持つ。長側辺突起は大きく下向きに造り出されながら棺蓋の斜面部に留まる一方、やや緩い角度で下向きに造り出されている短側辺突起は規模で長側辺突起を上回る。畿内中樞部の「同列化」プロセスのどの段階とも相容れない特徴を有しており、畿内以外の要素を持つと評価することも可能であろう。唯一、すべての突起が斜面部に造り出されている点を鑑みて第三段階に含めた。他方、駿河丸山古墳棺では、長短両側辺は規模や形状の面でも近く、造り出される高さもすべて共通していると言える。全体的に棺蓋から受ける印象もより畿内色が強く、第三段階への分類は妥当と考え

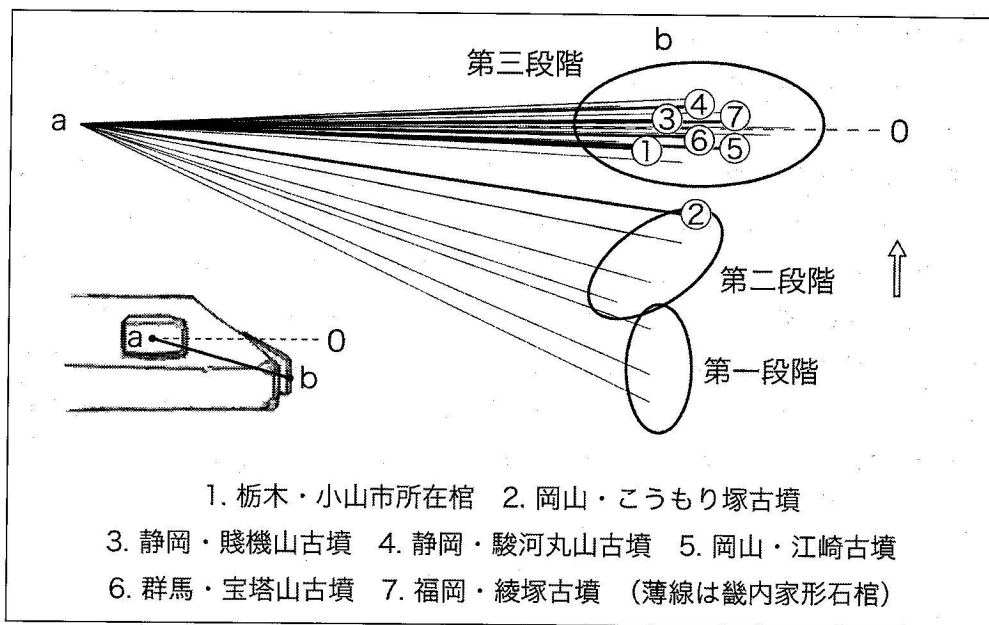


図6 棺蓋短側辺突起変遷模式図2

る。遺物から古墳に与えられた七世紀初頭という年代とも合致する。

群馬県前橋市宝塔山古墳棺は、棺身下部をあたかも脚部のように格子間状に加工したことで知られる。また、石室内に漆喰を塗布したり、石室や石棺に硬質の石材を使用しているという点から、宝塔山古墳の築造には卓越した技術者が携わったことがうかがえる(右島1994)。石棺は、長短両側辺の突起が規模と形状、造り出しの高さまで同一である。突起の特徴としては「突出」というより「貼付」された印象を受けるほど薄く扁平である。これは突起の突出角度が下向きであると判断することも可能だが、宝塔山古墳棺ならではの要素の一つと認めても差し支えないだろう。突起は斜面部から造り出され、下端を垂直面上面に接して止まる。以上の特徴から、第三段階Ⅱ期に相当する。

福岡県京都郡綾塚古墳棺は、小振りながら長短両側辺の突起が同一規模と形状で造り出されている。また、突起が斜面部から造り出され、垂直面上部で止まるという特徴からは、第三段階Ⅱ期が想定できる。棺蓋突起の配置や石棺そのものの矩形感からは畿内中枢部の影響が垣間見える。しかし、九州系の石棺で突起を造り出すものは、造り出す側辺によって突起の規模や形状、造り出す高さを変えるという特徴は薄い。綾塚古墳棺が畿内の影響を受けていながらも突起を同一に造り出した背景が、九州系石棺の突起の無区別によるものであるならば、「同列化」という観点からは綾塚古墳棺はこの分類の限りではない。

以上のように、畿内地域以外での家形石棺を検討した。小山市所在棺は悩んだ末に第二段階に含めたが、畿内家形石棺の第二段階では、短側辺突起の造り出し高さを意図的に変えているという特徴に対して、小山市所在棺は「同列化」と捉えても差し支えない範疇にある。また、こうもり塚古

墳棺は畿内家形石棺第二段階の特徴に合致するが、石棺型式だけを見ても畿内地方と吉備地方とが密接に関連していることが理解される。したがって、畿内家形石棺と同様に短側辺突起の変化が認められるのである。

上記の二棺以外の家形石棺に関しては、すべて第三段階に相当すると考えられる。これら諸「地方」において畿内家形石棺と類似する石棺の製作が認可されたと仮定すると、すべてが第三段階以降の石棺の影響を受けているということに気がつく。つまり、畿内以外の地域に家形石棺の情報が広まるのは、畿内中枢部において「同列化」した第三段階Ⅰ期以降の石棺と考えられる。

畿内以外の石棺の短側辺突起造り出しの高さを模式図で示した。図3をベースに畿内以外の石棺をプロットしたものであるが、第二段階の様相を呈すこうもり塚古墳以外が第三段階に分類できることが理解できる。なお、図上の各段階の分布は畿内家形石棺の分布とほぼ重なることも看過できない。

9. 考察：棺蓋突起の意義

さて、本稿では短側辺突起の動向を追い、「同列化」という現象がTK-43～TK-209期（六世紀末）に認められることを示して来た。元来意図された用途が何であったかはともかくとして、畿内地域において石棺棺蓋の短側辺に突出部の製作がはじまるのは、近江地域の石棺からであった。畿内に搬入された馬門石製石棺にはなく、また、これを模倣した初期の二上山系凝灰岩製石棺にも存在しておらず、近江地域の石棺に造り出された契機に関してはいまだなお多くの疑問を残している。最後に短側辺突起の意味を検討する。

畿内家形石棺の最大の特徴の一つでもある棺蓋突起だが、その目的には身分表象、実効的機能⁽²⁵⁾、そして装飾などが考えられよう。まず、身分表象という可能性を探ってみる。身分表象という考え方のなかには、大和王権の「公的棺」と一豪族の「私的棺」という捉え方がある（和田1976）。この場合、同じ棺蓋突起配置をもつ同型式の「公的」棺と「私的」棺の差は、使用石材と石棺の分布地になる。天皇（大王）家や諸豪族の支配領域に異なる石材の石棺が複数存在する場合は公私による区別案は有効であろう。しかし、古墳の内容（石室や副葬品、墳形や墳丘規模など）を比較すると、異なる石材の石棺を納めていても、同規模の石室を持つ事例などもあり、二古墳間に身分の差を求めることが困難になると考える。突起製作そのものが身分表象を目的とした、棺による階層制の体现という考え方もある（増田2004）。天皇（大王）を頂点とした畿内政権のヒエラルキーを肯定するならば、最高位である天皇（大王）墓に採用される石棺と同型式（長側辺に二対、短側辺に一对の突起）の石棺が畿内中枢部において主流となりうることの解釈が困難と考える。突起の数や配置によって身分の貴賤を表現した可能性は否定できないが、畿内中枢部という地理的範囲に限定しても、畿内家形石棺の使用例は多い。重さ数トンもある石材で家形石棺を製作すること、また、そのような家形石棺を納めることができる規模の横穴式石室を構築することから、被葬者はこのような古墳

を構築しうるだけの勢力基盤をもつ人物であり、当時の社会において社会的地位の高い人物であったことは推定に難くない。つまり、棺の突起にこだわるまでもなく、より顕在的に社会的身分を体现する方法はあったのではないかと考える。棺蓋突起による階層制の体现は魅力的な考えではあるが、いまいち懐疑の感が拭えないのである。

続いて実効的機能であるが、家形石棺に限らず、棺に突起を造り出した根源的理由が移動運搬の際に使用するためというのが筆者の認識である。ただし、畿内家形石棺に限定して言えば、150年から200年あまりのあいだに、突起の形状や規模が絶えず変化を続けるのは、当初の目的がすでに忘却されたからであろう。突起に縄を掛けて移動することも、石棺によってはあるいは可能であるかも知れないが、これを示唆する物的証拠がない以上は、棺蓋の突起を造り出すことの第一義としては実効的機能を認めることは難しい。第一段階の石棺を見ても、短側辺の突出部は長側辺突起とは形状と規模、製作される高さのいずれも共通しない点から、棺蓋突起としては長側辺突起とは異なる契機により発生した後出の付加要素といえるだろう。また、従前の馬門石製石棺が棺蓋短側辺に突出部（突起）を製作しない点、畿内中枢部において短側辺に突起をもつ石棺が増えても長側辺にのみ突起を配す型式の石棺が第三段階まで継続的に使用されている点からは、短側辺の突起（突出部）に実効的機能としての必然性はなかったと考えるのが妥当である。

上記の可能性に関しては決して否定するわけではなく、むしろ時期や地域、社会や思想背景の違いにより突起にもたされた意味合いが変化したものとする。筆者は、家形石棺の棺蓋突起には身分表象の意図を内在しながら外観的特徴を引き立てる目的として装飾的な意味合いが強かったと考えるのである。

10. 結論

今一度整理すると、TK-10期（六世紀中葉）の野洲円山古墳、野洲甲山古墳、鴨稻荷山古墳の近江三棺に出現した短側辺の突出部は、棺蓋の垂直面に造り出され、長側辺の突起とは規模や形状、造り出す高さが異なる（第一段階）。その後、TK-43期（六世紀後葉）を中心とした時期には、短側辺突起は長側辺突起と同一の規模および形状を示すようになる（第二段階）。TK-43～TK-209期（六世紀末）に至ると、規模と形状に加え、短側辺突起と長側辺突起の造り出される高さも同一となり「短側辺突起の同列化」が起きる（第三段階Ⅰ期）。そしてTK-209期（七世紀初頭）以降、短側辺突起は、突起の突出角度、規模や形状など長側辺突起の変化と軌を一にするという特徴がある（第三段階Ⅱ期）。

本稿では棺蓋短側辺突起の動向に着目して「短側辺突起の同列化」のプロセスを検討した。また、このプロセスの検討を通して、畿内中枢部においては、第三段階を以て「（畿内）家形石棺」が定型化することを短側辺突起の変化から捉えることができた。長側辺突起の突出する角度の変遷に加えて、短側辺突起の形状や規模、造り出す高さを観察することにより、畿内家形石棺の大まかな年代

推定の一指針となり得ると考えるものである。

最後に、本稿の主テーマ「短側辺突起の同列化」は2006年度に執筆した修士論文で、わずか一節ばかりの拙文であった。指導教授である岡内三眞先生には、常日頃よりの数々のご指導を、研究室の諸学兄には有益な助言を賜った。また、増田一裕氏には、ご多忙のなか、さまざまなご助言を賜った。末筆ながら記して感謝申し上げる。

注

- (1) 分類は九州地域という地理的分布要因に大きく立脚することになるが、石棺そのものの要素としては、組合式を基本とし、石棺に線刻を施すなど装飾性が高い特徴がある。棺よりも柶として意識されたとも考えられる。
- (2) 分類には山陰地方という地理的分布要因が大きく占める。石棺の特徴としては、刳抜式に小振りの突起を造り、多くの場合、棺身の長側面に横口を設ける。
- (3) 分類には奈良県及び大阪府を中心に分布している地理的な要因が大きい。刳抜式、組合式の両者が存在し、原則的には横口を設けない。また、本稿でいう「畿内」とは旧国領域として大和・河内・摂津・山背・和泉の五畿を指して使用する。なお、兵庫県でも多くの家形石棺が検出されているが、石棺の形態上の類似点や、使用石材の関係性からいわゆる「畿内」地域とは区分しがたいため、兵庫県検出の家形石棺も加えて畿内家形石棺の分布地域とする。
- (4) 畿内地域のなかでも家形石棺の分布が集中する奈良県・大阪府の地域という意味にとどめておきたい。
- (5) 長持形石棺を「第一種石棺群」、割竹形石棺や舟形石棺を「第二種石棺群」、そして家形石棺を「第三種石棺群」に置き換えるという案である(増田2004)。
- (6) 家形石棺を研究する上で関連するものとして第一種～第三種石棺群を挙げている。
- (7) 和田案では刳抜1・2型式に、増田案ではA2種棺蓋を備える石棺群にそれぞれ該当する。
- (8) 筆者の造語である。短側辺に突起を持たない有突起型の石棺という意味にとどめておきたい。
- (9) 和田案では刳抜0・2型式(三輪型)に、増田案ではA1種1類の棺蓋を備える石棺に該当する。
- (10) 高木氏論文「石棺輸送論」(高木1983)に詳しい。
- (11) 集成編年5期の古墳に石室材として二上山系凝灰岩が使用された事例があるが、単発的なケースであり、本格的な石切り場の想定は難しいとする増田一裕氏の見解を採用した(増田2003b p.20 註記160)。
- (12) 長側辺に設けられた突起とは明確に異なる形状を呈しており、また、後出する短側辺突起と同義に製作されたか判断しかねる。本稿では後出の短側辺突起と区分するために、野洲円山古墳棺、野洲甲山古墳棺、鴨稻荷山古墳棺に限り、短側辺の突起は「突出部」と称することとする。
- (13) 二上山系凝灰岩を使用している。二上山から石材を切り出した後大和川を下って大阪湾に出て、淀川を遡って琵琶湖に入り鴨川から稲荷山古墳まで、実に150kmの距離を水上輸送したと考えられる。畿内中枢部で集中的に使用された二上山系凝灰岩製石棺としては異例の長距離移動である。
- (14) 馬門石が産出する宇土市では、檜崎古墳2号棺のように両側辺に突起を製作する例もある。舟形石棺を家形石棺の形態上の直接的な系譜として求めることは難しいが、突起の配列に関して野洲の二棺の製作者が舟形石棺からなんらかのヒントを得た可能性はある。
- (15) なお、野洲円山古墳の玄室奥には二上山系凝灰岩の組合式石棺が安置されていた。このことから円山古墳の被葬者が畿内中枢部との密接な結びつきを有したことが強く示唆されると同時に、刳抜式石棺の突出部の特徴が畿内中枢部へと伝わったルートの可能性をも提示している。
- (16) 竹田2003に詳しい。
- (17) 古墳時代の石棺の製作には、石材の切り出しから運搬、加工など様々な工程が想定でき、各工程で多くの人間が関わったと考えられるが、本稿では石棺の生産体制には触れないため、単一や複数という制限を取り払い「製作者」として一括する。しかし、念頭においては石棺の形態を最終的に決定することができ

- た裁量権保持者である。それは時には王権そのものであったり、あるいは石材を直接加工した技術者であった可能性も考えられるであろう。
- (18) 棺蓋突起は残存していないため、突起の突出角度が水平であったかは厳密には分らない。
- (19) ただし、増田氏が喚起するように、個々の石棺で突出角度が厳密に決定されているわけではない(増田2003)。特に製作時期が近いと考えられる石棺では突出角度が前後することもあり、長側辺突起の突出角度のみで石棺間の新旧関係を断ずる危険性に関しては注意すべきである。
- (20) 羨道部の石棺が追葬として二次的に運び込まれたことを前提としている。金山古墳は盗掘を受けていたため時期差を明確にする遺物は少なく、前述の前提は、二棺に若干の差異が認められるという点に依存していることは否めない。
- (21) 石室に複数の棺がある場合「奥が古く、手前が新しい」と考えられるが、見瀬丸山古墳では奥棺がより新しい特徴を示している。一次葬で安置した石棺を追葬の際に入れ替えることは多くの難を伴うが、見瀬丸山古墳に関しては石室も広く移動のスペースがあるため、物理的には不可能ではないと考える。
- (22) 奥棺の棺蓋突起は造り出し位置が高くⅠ期に含めるべきとも考えたが、長側辺突起が僅かながら垂直面にかかっていることからⅡ期に含めた。
- (23) 前棺が追葬という前提で、奥棺の棺蓋の特徴から六世紀後半としている。
- (24) 刳抜式の有突起型家形石棺に限って言えば、畿内中樞部ではこの第三段階Ⅰ以降は定型した型式(=長側辺二対、短側辺一对の突起を配する石棺)以外は製作されないようである。
- (25) 本稿でいう実効的機能とは、「石棺の移動の際に突起に縄をかける」など物理的に必要性を要する行為を想定している。

引用・参考文献

- 明日香村史刊行会 1974『明日香村史』上巻
- 石橋 宏 2004「家形石棺の再検討」『古墳文化』創刊号國學院大學古墳時代研究会
- 一瀬和夫 1993「近畿地方」『季刊考古学』第45号(pp.62～66)
- 梅原末治 1938「近畿地方古墳墓の調査3」『日本古文化研究所報告』第9
- 大阪府教育委員会 1989『有形文化財・無形文化財等総合調査報告書』平成6・7年度
1953『金山古墳および大藪古墳の調査』大阪府文化財調査報告書第2輯
- 大塚初重・小林三郎・熊野正也編 1989『日本古墳大辞典』東京堂出版
- 宮内庁書陵部 1994「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要』第45号(pp.82～109)
- 小林行雄 1951「家形石棺」『古代学研究』4・5
- 静岡考古館 1962『駿河丸山古墳』
- 静岡市教育委員会 1953『静岡賤機山古墳』
- 総社市 1987『総社市史』考古資料編
- 高木恭二 1983「石棺輸送論」『九州考古学』第58号(pp.42～54)
- 高木恭二・渡辺一徳
1990「二上山ピンク石製石棺への疑問 一九州系舟形石棺から畿内系家形石棺への推移一」『乙益重隆先生古稀記念論文集 九州上代文化論集』(pp.239～270)
- 高島町教育委員会 1987「稲荷山古墳」『稲荷山古墳・永田城址』高島町文化財資料集8
- 高橋健自 1913『考古学』聚精堂
- 宝塚市 1977『宝塚市史』第四巻 資料編Ⅰ
- 竹田政敬 2003「大和・植山古墳の家形石棺」『古代近畿と物流の考古学』学生社(pp.238～247)
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』
- 富田林市 1985「第五章 古墳時代の富田林市」『富田林市史』第一巻
- 奈良県教育委員会 1972「ツボリ山古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第27冊

奈良県立橿原考古学研究所 1990『斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書』

1987『史跡 牧野古墳』広陵町文化財調査報告 第1冊

日本古文化研究所 1935「近畿地方古墳墓の調査1」『日本古文化研究所報告』第1

藤井利章 1979「家形石棺と古代氏族」『橿原考古学研究所論集』第4 吉川弘文館

藤田和尊 2002「巨大な横穴式石室と石棺—奈良県條ウル神古墳」『季刊考古学』第80号

増田一裕 1977a「畿内系家形石棺に関する一試考（上）」『古代学研究』83 (pp.23～36)

1977b「畿内系家形石棺に関する一試考（下）」『古代学研究』84 (pp.17～38)

2003a「家形石棺の基礎的分析（上）」『古代学研究』162 (pp.1～21)

2003b「家形石棺の基礎的分析（中）」『古代学研究』163 (pp.1～20)

2004「家形石棺の基礎的分析（下）」『古代学研究』164 (pp.1～20)

右島和夫 1994「総社古墳群の研究」『東国古墳時代の研究』学生社

八木契三郎 1899『日本考古学』

野洲町教育委員会 2001『史跡大岩山古墳群 天王山古墳・円山古墳・甲山古墳調査整備報告書』

若杉竜太 1997「九州石棺考」『先史学・考古学論究Ⅱ』

熊本大学文学部考古学研究室創設25周年記念論文集 龍田考古会

和田晴吾 1976「畿内の家形石棺」『史林』59巻3号京大歴史研究会

図版出典

図1：筆者作成

図2：甲山・円山：野洲町教育委員会2001、稲荷山：高島町教育委員会1987、耳原：大阪府教育委員会1989、新宮山・水尾南：奈良県立橿原考古学研究所1990、條ウル神：藤田2002、植山：竹田2003、天王山：梅原1938、都塚：明日香村史刊行会1974、牧野：奈良県立橿原考古学研究所1987、見瀬丸山：宮内庁書陵部1994、金山：大阪府教育委員会1953、ツボリ山：奈良県教育委員会1972、白鳥塚：宝塚市1977、お亀石：富田林市1985、艸墓：日本古文化研究所1935より図面引用、デジタルトレース・一部改変。筆者作成。

図3・6：藤田2002より石棺実測図引用、デジタルトレース・一部改変。筆者作成。

図4：筆者作成

図5：小山市所在棺：石橋2004、こうもり塚・江崎：総社市1987、賤機山：静岡市教育委員会1953、丸山：静岡考古館1962、宝塔山：右島1994、綾塚：若杉1997より図面引用、デジタルトレース・一部改変。筆者作成。